

2021年 2月 1日

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院歯学研究科長 古市保志 殿

主査 石井久淑

副査 齊藤正人

副査 宮川博史



今般 Durga Paudel にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

1 学位論文題目

Proteomic analysis of salivary proteins and metagenomics analyses of oral and intestinal microflora in a rat model of chronic resistant stress

- 2 論文要旨 別添
- 3 学位論文審査の要旨 別添 (様式第12号)
- 4 最終試験の要旨 別添 (様式第13号)

以上の結果 Durga Paudel は博士 (歯学) の学位を授与する資格のあるものと判定する。

学位論文審査の要旨（2行目）

主査 石井久淑



副査 齊藤正人



副査 宮川博史



氏 名（8行目） Durga Paudel

学位論文題目（10行目から）

Proteomic analysis of salivary proteins and metagenomics analyses of oral and intestinal microflora in a rat model of chronic resistant stress

以下本文（15行目から1000字以内）

本研究は、精神的ストレスと唾液中タンパク及び口腔内と消化管内細菌叢との関係について生化学的、分子生物学的及び行動学的手法を用いて総合的に検討したものである。その結果、本研究ではストレス刺激に対して発現量が変化するタンパク質（BPI fold-containing family A member 2, BPIFA2; von-Ebner's gland protein, VEGP; carbonic anhydrase等）を新たに同定するとともに、ストレス環境における細菌叢の分布変化（alpha diversityの減少）が見い出されている。

これらは、ストレス環境におけるバイオマーカーとしての高い有用性とストレスに関連する口腔内疾患（舌痛症や味覚障害等）の病因の解明或いは新たな予防と治療のアプローチを予見する臨床的にも高い発展性が期待される。

論文審査では、本文中の研究背景、実験手技、結果の解釈及び考察について適切に記載されており、大きな修正要求はなかった。一方、図表の記載及び説明について加筆の必要性のコメントが主査・副査からあり、これらの点については修正論文で適切に改善された。最終的に、主査・副査はその修正論文の内容を高く評価し、学位論文にふさわしいと判断した。

最終試験（学力の確認）の要旨（2行目）

主査 石井久淑

副査 齊藤正人

副査 宮川博史



氏 名（8行目） Durga Paudel

以下本文（10行目から200字以内）

2020年12月1日に、主査及び2名の副査と本人との間で、提出された学位論文について議論を行なった。その際、主査・副査の質問に対して申請者から適切な回答・説明が行われた。また再提出された修正論文において、指摘した内容が適切に改善されており、申請者が議論の内容を十分理解できていたと判断される。したがって、Durga Paudelは、学位を授与するのに十分な学力を有していると判断した。